

令和 5 年 9 月 15 日現在

機関番号：32107

研究種目：基盤研究(B)（海外学術調査）

研究期間：2017～2021

課題番号：17H04499

研究課題名（和文）発展途上にあるモンゴル国の子どもの身体発育加速化現象とスポーツ医科学の学術調査

研究課題名（英文）Research on promotion of physical development of children and sports medicine in developing Mongolia

研究代表者

橋爪 和夫（Hashizume, kazuo）

アール医療専門職大学・リハビリテーション学部 ・教授

研究者番号：80189472

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 12,100,000円

研究成果の概要（和文）：モンゴル国の子どもや大学生とスポーツ選手の体格、生活健康、栄養の調査を実施した。モンゴル国立教育大学体育学部の教員を富山大学に招聘してアダプテッドスポーツ、パラリンピックに関する共同研究を行い学会発表をした。C. BAZARSUREN女史を日本に招聘し、日本武道学会で障害者柔道の指導法について、日本体育学会でパラリンピック柔道の発展と多文化共生社会形成の関係性について発表した。2022年度はまとめとしてモンゴルからパラリンピック選手を含む4人を招聘して日本でパラリンピックと多文化共生社会や2020東京オリンピック・パラリンピックのレガシーについて日本とモンゴル国の2国間国際会議を開催した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究はモンゴル国の子ども・スポーツ選手・障害者スポーツ選手の健康・体力・栄養を調査した。子どもの発育発達は経済の影響を受けていること、体力は日本人並みであるが栄養状態は良好でないことを明らかにした。パラリンピック選手を研究対象とすることで、モンゴル国の多文化共生社会の形成過程と発展について調査することができた。モンゴル国にアダプテッドスポーツの教育を創生することができた。本研究のまとめとして、モンゴル国と日本の2国間国際会議でオリンピック・パラリンピックのレガシーに関する会議を開催してモンゴル国に障害者スポーツの啓発をすることができた。

研究成果の概要（英文）：A survey was conducted on the physique, daily health, and nutrition of Mongolian children, university students, and athletes. Invited faculty members of the Faculty of Physical Education, Mongolian National University of Education to Toyama University, conducted joint research on adapted sports and the Paralympics, and made a presentation at an academic conference. Invited Ms. C. BAZARSUREN to Japan and made a presentation on the teaching method of Judo for people with disabilities at the Japan Society of Budo and the relationship between the development of Paralympic Judo and the formation of a multicultural society at the Japan Society of Physical Education. In 2022, we invited 4 people from Mongolia, including a Paralympic athlete, and held a bilateral international conference between Japan and Mongolia on the Paralympics, multicultural society, and the legacy of the 2020 Tokyo Olympics and Paralympics.

研究分野：身体教育学

キーワード：モンゴル国 体力 発育発達 障害者スポーツ パラリンピック 栄養 発展途上国

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

モンゴル国は、子どもの教育環境を整備する余裕がないままに、先進国化が進んでいる。貧困家庭の子どもでも優先的にスマートフォンなどの情報機器を有し国境のない知識基盤社会に存在している。国や教育環境が発展途上にありながらも、子どもはインターネットを介したグローバル化に直面している。社会環境の急速な変化は、モンゴル国の首都ウランバートルや地方に住む子どもの心と身体に先進国の子どもが経験したことの大きい影響を及ぼしていると考えられるが、ほとんど調査されていない。本研究は、発展途上にあるモンゴル国のグローバル化がもたらしている子どもを取り巻く社会・生活環境の変化が子どもの心と身体に及ぼしている影響と子どもの夢と希望を実現するためのスポーツ・パラリンピックタレント発掘を調査することであった。発展途上国における身体発育発達パターンを検証した報告は少ない。大澤ら(2011)、千葉ら(2008、2010)のタイの子どもの身体発達に関する研究、鍋谷ら(2010)のカンボジアの子どもの肥満に関する研究などは、発展途上国での数少ない発育発達研究である。藤井(連携研究者; 2008)、烏雲・藤井(2007)は中国内モンゴル自治区の蒙古族の身体発育パターンについて、ウェーブレット補間法を適用し、日本人との比較から1985年と2005年の20年間の時代的变化を解析し、蒙古族の発育促進現象を確認している。しかし、モンゴル国における身体発育研究については筆者ら研究が第1報であった(The ICHPER-SD Asia Journal of Research, 6(2), 79-86, 2014)。発展途上における身体発育発達研究は、かつて日本が経験した戦後の発育促進現象を現在の科学的手法で検証できる。特に、モンゴル国ではタイ、カンボジアや他の発展途上国よりも急激な経済変動が起きており、今こそ発育発達研究の進歩によるコホート研究が開始されなければならない。本研究により日本民族と遺伝的に近いモンゴル国の発育発達の促進化あるいは遅延化現象を解析できれば国際的に貴重な資料が提供できる。特にモンゴル国では、首都と地方の社会格差が生じており、子どもの第二次性徴にも促進と遅延という二極化が発現する可能性が予測される。第2次性徴の加速/遅延現象の二極化の発現は好ましいことではない。それは、家族の経済状況や教育環境などの格差が子どもの脳に影響を及ぼしていることに起因している可能性が高いからである。この視点からの学術報告は見当たらない。先進国化は子どもの体力低下を招くばかりでなく伝承的遊び文化の衰退や消滅を生じる。子どもの鬱病や自死の増加と低年齢化や生きる力の低下現象は先進国の課題である。子どもの心と身体に及ぼす教育環境の変化の影響は、縦断的研究として研究計画が立案されなければ導くことができない結論である。モンゴル国は、子どもの生活環境と教育環境が急速に変化しているので、体力の推移と運動文化の変化と生きる力の関連性を調査する適時にある。また、先進国が経験している多様な文化の喪失経験を基に、支援策も提案できる時機である。

2. 研究の目的

本研究の3年次から5年次後半までは新型コロナウイルスの影響でモンゴル国での調査ができなかった。4年次と5年次の当初目的を6年次にまとめて行った。このような状況のため、研究当初の目的を以下のように変更した。

モンゴル国の子どもの身体発育の縦断的調査(コホート研究)を実施して身体の発育発達の加速化現象と第二次性徴への影響を解析する。首都に住む子の体格は地方に住む子の体格よりも良い傾向にあるが、体力が伴っていないため、肥満や生活習慣病の実態を調査する。モンゴル国では、国連世界食糧計画による学校給食支援が行われているが、地方の栄養調査と体格に関するバランスの調査を実施する。

オリンピック・パラリンピック選手タレント発掘とスポーツ医科学基盤整備の調査として、

パラリンピックで活躍している選手の育成環境の基盤整備に関する調査を行う。2020 東京オリンピック・パラリンピックのレガシーとしての日本とモンゴル国の障害者スポーツの国際交流に関する調査を行う。

3．研究の方法

体格体力・発育発達研究は同じ子どもを毎年縦断的に追跡調査するコホート研究であった。基本的に、毎年9月新学期当初、同じ条件で、同じ対象者を調査した。生活健康・運動有能感調査と身体の発育発達速度との関連性を解析した。先進国とモンゴル国の身体発育に対してウェーブレット補間法を用いた解析により発育促進現象を確認し、経済変動との関連性を検証した。バスケットボール選手のスポーツ障害調査をした。モンゴル国の伝統舞踊と音楽の調査をした。モンゴル国の障害者スポーツ関係者を日本に招聘して、2020 東京オリンピック・パラリンピックのレガシーに関する現地調査を実施し、2 国間国際会議を開催した。

4．研究成果

平成29年度（初年度）ウランバートル市第28 学校とドルノド県チョイバルサン市にある第12 学校の子供の身長、体重、生活健康調査を実施した。モンゴル国立スポーツ医学研究所及びモンゴル国立スポーツ教育担当者を訪問して、モンゴル国のスポーツ医学の課題とスポーツ教育の課題を聞き取り調査した。本調査は、モンゴル私立体育大学の教員と共同で行った。モンゴル国立教育大学体育学部長及び関係者とモンゴル国の体育スポーツ教育について協議した。そして、同学部の教員を対象として山地啓司研究分担者が体育・スポーツに関する集中講義を2日間行った。

平成30年度（2年次）9月に1年次の縦断的調査としてウランバートル市第28 学校とドルノド県チョイバルサン市第12 学校の子供の身長、体重、生活健康調査を実施した。チョイバルサン市第12 学校では、これまでの中間報告を行った。また、新たにアルハンガイ県学校の子供らについて同様の調査を実施した。本年度は栄養調査を開始した調査校のうち中学2年生の24時間の栄養調査を実施した。子どもが紙媒体で個々の飲食物の名称と重量を計測し、さらに子ども自身がデジカメで飲食物を撮影した写真を食品分析表で解析した。食品分析表は日本国のものを用いた。また、スポーツ医学の分野の栄養に関する問題点を把握するために体育学生5人の3日間の栄養調査を実施した。大学生は3日間の全ての摂取物の名称と重量と写真を記録した。記録されたものから食品分析表を用いて摂取カロリー、摂取栄養素を分析し学生に改善点を提示した。モンゴル国立教育大学体育学部のスポーツ医学担当教員を10月から12月までの3ヶ月間富山大学に招聘してアダプテッドスポーツ、パラリンピックに関する共同研究を行った。特に、パラリンピック柔道について重点的に調査し、日本アダプテッド体育・スポーツ学会で発表した。12月にモンゴル国立教育大学体育学部で教員や修士の学生及び一般市民を対象として研究代表者橋爪和夫と研究協力者山地啓司が運動生理学の演習を行い、そのデータの活用方法も含めて山地啓司研究協力者が体育・スポーツに関する集中講義を行った。また、モンゴル国立教育大学体育学部の5人のスポーツ専攻学生の栄養調査の結果について報告した。

令和元年度（3年次）縦断的調査を実施し、9月にモンゴル国体育文化スポーツ機関職員 CHOYONDORJ BAZARSUREN 女史を日本に招聘した。女史は日本武道学会で視覚障害者柔道の指導法について発表し、日本体育学会でモンゴル国のパラリンピック柔道の発展と多文化共生社会形成の関係性について発表した。本研究により、モンゴル国の障害者のダイバーシティが BAZARSUREN 女史の履歴にあるオリンピックとパラリンピックの両選手育成というハイブリットにより推進されていることが報告された。

モンゴル国のパラリンピック柔道の発展と多文化共生社会形成の関係性

CHOYONDORJ BAZARSUREN¹⁾

山口 香²⁾ 齊藤まゆみ²⁾ 橋爪和夫³⁾ 山地啓司⁴⁾

¹⁾ Implementary agency of government Mongolia, Physical culture and sports authority
²⁾ 筑波大学 ³⁾ 富山大学 ⁴⁾ 富山大学名誉教授

モンゴル国ではスポーツにおける障害が多発している。群馬大学の坂本教授と中澤助教とモンゴル国立医科大学の教員が柔道におけるスポーツ障害について報告した。モンゴル国ではスポーツ障害の発生において障害者自身が弱かったからだという考え方があり、スポーツ医学による科学的根拠に基づく原因の把握を行い、スポーツ障害の予防につながる調査報告がモンゴル国研究者との共同研究で推進できた。奈良教育大学の井上准教授はウランバートル・およびウブト県で、民族舞踊（ビー・ビルゲー）に関する調査を行った。国立高等音楽・舞踊学校教員や国立教育大学でモンゴル国西部に残る伝統的民族舞踊の原初形態についての聞き取り調査をした。それによって、都心部で実演される民族舞踊とモンゴル国西部地域において伝承される民間舞踊との差異および、少数民族の舞踊の特徴についての知見を得ることが出来た。加えて、モンゴル国西部地域ウブス県でモンゴル民族舞踊伝承者から実際の舞踊を実施してもらい、映像資料とした。栄養調査は中学2年生と柔道選手について実施した。その結果、総じて摂取量が少ないこと、特に、ビタミン類やカルシウムの少なさもわかった。

令和4年度（令和2年度4年次と令和3年度5年次分）本年度は最終年度としてこれまでの実績を踏まえて、2 国間国際会議を開催した。モンゴル国のアダプテッドスポーツの振興に携わっているモンゴル国人 4 人（CHOYONDORJ BAZARSUREN；State committee for Physical Culture and Sports regulatory agency of government of Mongolia、KHULGAR TSERENVANDAN；モンゴル国立医科大学医学部講師、ZANDRAA GANBAATAR；2020 東京パラリンピック射撃選手、OIDOV ERDENEPUREV；モンゴル国営テレビ（Mongolian national broadcaster）TV ディレクター）を日本に招聘した。

【緒言】モンゴル国の人口は約 324 万で、実際に視覚障害のある人は約 11 万人ともいわれるが、2011 年の政府報告では視覚障害者は 11,700 人である。2019 年 5 月「障害のある子どもを含むすべての子どもが教育を受けることができる法律」が制定された。本研究の目的は、モンゴル国パラリンピック柔道の発展と視覚障害者の社会的環境の変化との関係性を検討することである。

【モンゴル国の視覚障害者と柔道の環境】2019 年モンゴル国視覚障害者協会では 9000 人の協会員と連絡が取れている。103 人がウランバートルで 10 人が地方で FM ラジオ局、教科書作成、マッサージ学校、リハビリテーション施設、バスタコヒーセンター等で働いている。視覚障害者がつくるコヒーは政府職員が購買し、経済的な循環が図られている。政府は障害者の社会的環境の整備を進めるに当たり、障害者の体育スポーツ行政を推進している。モンゴル政府は視覚障害者スポーツとして、柔道、ゴールボール、マラソンの 3 種目を特に推奨している。近年は地方でも障害者柔道が発展している（表 1）。首都ウランバートルに唯一設置されている視覚障害者特別支援学校には小学生から高校生まで 123 人が在籍し、16 人が柔道を習っている（2019）。

【モンゴル国のパラリンピック柔道と社会環境】現在のパラリンピック柔道選手は女性 2 人男性 4 人である。これまでにモンゴル国で約 70 人がパラリンピック柔道選手を目指した。パラリンピック柔道は Bazarsuren 女史が 2005 年に視覚障害者に柔道を指導したのが始まりである。障害者柔道が始動された当初は障害者への偏見や差別があった。2008 年、2012 年のパラリンピックの後、女史と選手たちの努力、生活、柔道トレーニングを紹介するテレビ番組が放送され、モンゴルパラ柔道と視覚障害者の社会的認識が向上した。女史は柔道の指導において 2016 年国家勲章を受章し、現在、政府職員としてスポーツ文化施策計画実施機関で働いている。女史は 2016 年のリオ・オリンピック柔道女子の銀メダリスト、パラリンピック柔道男子の銅メダリストの指導歴がある。オリンピックとパラリンピック、さらに、男子と女子を指導したモンゴル国で最初の女性柔道コーチである女史のキャリアは個性的であり、女性スポーツ指導者としての社会参画に寄与している。女史の柔道の女性教員もパラリンピック柔道コーチに就任している。



2016 リオ・オリンピックメダリスト

	視覚障害者	柔道選手	全国大会参加回数	視覚障害者指導員	全国柔道選手数
日本 ¹⁾	320,000	130	0	計 16 人（指導員 15 名、指導員 1 名）	17,000（指導員 1 名）
モンゴル ²⁾	11,700	0	全国大会参加回数に達し参加	指導員 1 名（女史）	2,000（素人人口、指導員 5 千人）

¹⁾ 日本視覚障害者協会（2018 年度の統計）、²⁾ 齊藤まゆみ、2018 年調査、全国大会参加回数、視覚障害者指導員の数およびコーチの人数

【今後の課題】柔道場は首都に 1 つなので、障害者は通常その後で練習している。練習場の確保や地方から来る生徒の住居・教育環境の整備が課題である。【まとめ】

1. モンゴル国パラリンピック柔道の発展はモンゴル国障害者スポーツの発展に寄与し、障害者の生活基盤や特別支援教育への理解にも貢献している。
2. モンゴル国のパラリンピック柔道の発展はモンゴル国のダイバーシティの推進に寄与している。

引用・参考文献
1. 日本視覚障害者協会編、<http://jvsh.jp/jvsh/infomation/>
2. Enkhjin D., 齊藤まゆみ, パラリンピックから見たモンゴル国, 第 23 回日本アダプテッドスポーツ学会, スポーツ学会, 2018.
3. CHOYONDORJ BAZARSUREN, 山口 香, 橋爪和夫, モンゴル国パラリンピック柔道に関する研究, 日本武道学会第 52 回大会抄録, p.101, 2019.
付記 本研究は JSPS 研究費 17H04499 の助成を受けた。

モンゴル国パラリンピック柔道に関する研究

○CHOYONDORJI BAZARSUREN（モンゴル国体育文化スポーツ機関）
山口 香（筑波大学） 橋爪和夫（富山大学）

【モンゴル国パラリンピック柔道の歴史】モンゴル国は、2000 年に国際パラリンピック委員会に正式登録した。モンゴル国のパラ柔道は 2005 年に G.Lkhagvaasuren 博士（パラリンピック委員長）の勧めで Bazarsuren 女史が視覚障害者を指導したのが始まりである。女史は 1997 年に女性で初めてナショナルチーム柔道コーチに就任した。2007 年にパラ柔道選手が初めてナショナルチームに登録された。2002 年に柔道世界大会女子金メダリストを指導し、2016 年のリオ・オリンピック柔道女子銅メダリストを 2004 年から 3 年間指導した。女史は最初ナショナルチーム女子パラ選手（男女）を同じ場所で開催していたが、ナショナルチームの選手が視覚障害者と一緒に教えられ、ことに不都合を感じるようになったので、2007 年にナショナルチームを別のコーチに委託し、パラ・コーチに専念した。女史は 1998 年のアジア大会（バンコク）に柔道選手として出場しているが、1999 年ワールドカップサンボ種目の金メダリストでもある。リオ・パラ柔道男子銅メダリストも指導している。

【現在のモンゴル国の視覚障害者の柔道】首都ウランバートルに唯一設置されている第 116 視覚障害者特別支援学校には小学生から 20 歳ぐらいまでの 123 人が 2019 年度在籍しており、16 人が柔道を習っている。現在のモンゴル国のパラリンピック柔道選手は女性 2 人男性 4 人である。近年視覚障害者柔道選手は首都以外の地域でも急増している。人口約 324 万人のモンゴル国におけるオリンピック・パラリンピック柔道は発達している。

【Bazarsuren コーチの指導法】女史は①視覚障害者が健常者と一緒に同じ場所での柔道の練習をすることは、パラ選手の心理に良い影響を及ぼし、トレーニングの効率的効果がある。②地方在住の視覚障害者が国際大会に出場することは他者に劣る思いなどの社会性が高まると考えている。指導では以下のことを心掛けている。①一人一人の選手の年齢、性別、身体的特徴、考え方、精神性などをよく理解した上で指導する。例えば、子どものころからモンゴラム相撲が好きで 2010 年から柔道始めた全盲 B1 の G 選手の場合、よく指をすることを通して、G 選手がきちんとイメージを持ってから練習を行うことが出来るようになるまで理解させて技のレベルを次第に高めていった。G 選手が自分の技のイメージを確立するためのコーチへの質問は、コーチ自身の指導力を高めることに繋がった。②選手の個性と身体能力に合う技をよく説明し、B2・B3 はビデオも活用し、技の改善点をきちんと指導する。選手の体力に応じた技を自分で正しく習得させる。選手の疲労度に応じて運動量を加減し、ミスが多ければ個別指導、差別化指導を行う。視覚障害者は特に繰り返し技を練習して、自分の得意技を獲得させる。

【文献】Enkhjin D., 齊藤まゆみ, 第 23 回日本アダプテッド体育・スポーツ学会, 2018. 付記 本研究は JSPS 研究費 17H04499 の助成を受けた。

2020 東京オリンピックのモンゴル国のホストタウンであった茨城県行方市と桜川市を訪問してアダプテッドスポーツの振興のための情報を収集した。2020 東京オリンピックのホストタウンがレガシーとしての国際交流をどのように推進しているのかを調査した。モンゴル国からの招聘者と日本の関係者(香田泰子・筑波技術大学教授・日本視覚障害者柔道連盟理事、多田尚克・モンゴル国北極星勳章受章・公益社団法人日本モンゴル協会理事、鈴木周也・茨城県行方市長、布村幸彦・前東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会

**日本とモンゴル国の
アダプテッドスポーツの普及発展のための
2 国間国際会議**

2023年3月30日 (木) 15時～18時
ハイブリッド形式にて開催
(橋爪研究室までお問い合わせ下さい)

開会・歓迎の挨拶	柳 久子 アール医療専門職大学 学長
一般公開 シンポジウム	司会 橋爪 和夫 アール医療専門職大学 教授
15:05～15:25	視覚障害者のアダプテッドスポーツの紹介 ～モンゴル国のアダプテッドスポーツ教育カリキュラムへの提案教材～ 香田 泰子 筑波技術大学教授、日本視覚障害者柔道連盟理事
15:25～15:45	モンゴル国のオリンピック指導者からパラリンピック指導者への道 ～これからのモンゴルのスポーツの発展・スポーツ・フォー・オール～ CHOYONDORJ BAZARSUREN モンゴル国政府体育・スポーツ機関
15:45～16:00	モンゴル国パラリンピック選手への道 ～私の場合とこれからの選手たち～ ZANDRAA GANBAATAR 株式会社『SUU』2020 東京パラリンピック射撃選手
16:00～16:15	モンゴル国のスポーツ報道 ～スポーツ報道の力を多文化共生社会推進に活用～ OIDOV ERDENEPUREV モンゴル国営テレビディレクター
16:15～16:30	モンゴル国の子どもの体格・体力の現状 ～スポーツ選手発掘に向けて～ KHULGAR TSERENVANDAN モンゴル国立医科大学・生物医学学部講師
16:30～16:40	休憩
16:40～17:00	日本とモンゴル国のライフル射撃指導 ～多文化共生社会への私の歩みと将来～ 多田 尚克 モンゴル国北極星勳章受章・公益社団法人日本モンゴル協会理事 前茨城県ライフル射撃協会理事 第27回オリンピック競技大会 ライフル射撃コーチ 元モンゴル国射撃代表チームコーチ
17:00～17:30	モンゴル国と茨城県行方市の2020東京オリンピック・パラリンピック ホストタウンのレガシーとしての国際交流の在り方 ～期待と展望～ 鈴木 周也 茨城県行方市長
17:30～18:00	東京五輪パラリンピックを振り返って ～レガシーを考える～ 布村 幸彦 前東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会副事務総長
閉会の挨拶	翻訳及び通訳 ERDENESAMBUU DELGERBAYAR 筑波技術大学大学院修士課程技術科学研究所2年生 全盲 モンゴル国出身

連絡先 学校法人アール医療専門職大学 R Professional University Of Rehabilitation
リハビリテーション学部 橋爪和夫研究室 〒300-0032 茨城県土浦市湖北2-10-35
E-mail : hashizumekazu0915@gmail.com Tel : 090-9445-1628
会場への参加者、ウェブでの参加者は橋爪和夫研究室までご連絡ください。

副事務総長) が日本で国際会議を開催して両国にインターネットで配信した。本調査により、オリンピックのホストタウンであった地域がレガシーとしてパラリンピックにも国際交流の輪を拡げる可能性が確認された。この会議は本研究による学術的調査の成果を両国の持続可能な国際交流に活かすために有意義な2国間国際会議であった。また、在日モンゴル国大使館全権大使を訪問して、今後のモンゴル国の障害者スポーツへの支援についての協力体制について協議した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 3件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Nakazawa Rie, Sakamoto Masaaki, Dambadarjaa Batlkham, Khuyagbaatar Enkhchimeg, Khadbaatar Ariunaa	4. 巻 32
2. 論文標題 Fact-finding survey regarding judo-related injuries of judokas in developing country	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Journal of Physical Therapy Science	6. 最初と最後の頁 161 ~ 165
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1589/jpts.32.161	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 藤井勝紀, 橋爪和夫, 糟谷浩輔, Purevsuren Munkhzul, Khulgar Tserenvandan, Enkhjin Davaasuren	4. 巻 65 (4)
2. 論文標題 モンゴル国青少年の生物学的パラメーターの位置づけ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 教育医学	6. 最初と最後の頁 —
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 Tserenvandan KH., Hashizume K., Jadanbaa B., Munkhzul P.	4. 巻 1
2. 論文標題 Research on MONGOLIAN children's physical development	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 モンゴル子どもセンター60周年記念報告書	6. 最初と最後の頁 270-275
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 Rie Nakazawa, Masaaki Sakamoto, D. Batlkham, B. Telmen, Kh. Enkhchimeg, Kh. Ariunaa, B. Yanjinsuren, O. Batgerel.
2. 発表標題 Questionnaire survey about Basketball-related injuries among young athletes in Mongolia
3. 学会等名 The 14th Annual Meeting of the Mongolian Society of Physical and Rehabilitation Medicine
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中澤理恵, B. Yanjinsuren, D. Batlkham, B. Telmen, Kh. Enkhchimeg, Kh. Ariunaa, 坂本雅昭
2. 発表標題 モンゴル国における若年柔道選手・バスケットボール選手に対する外傷・障害調査
3. 学会等名 第12回日本保健医療学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 C.BAZARSUREN・山口香・橋爪和夫
2. 発表標題 モンゴル国パラリンピック柔道に関する研究
3. 学会等名 日本武道学会第52回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 C.BAZARSUREN・山口香・齋藤まゆみ・橋爪和夫・山地啓司
2. 発表標題 モンゴル国のパラリンピック柔道の発展と多文化共生社会形成の関係性
3. 学会等名 日本体育学会第70回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 井上邦子
2. 発表標題 モンゴル民俗舞踊ピー・ビルゲーについて
3. 学会等名 第137回21世紀スポーツ文化研究所月例会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Enkhjin Davaasuren, 斉藤まゆみ
2. 発表標題 パラリンピックから見たモンゴル国における障がい者スポーツの現状と課題
3. 学会等名 第23回日本アダプテッド体育・スポーツ学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山地啓司
2. 発表標題 体育・スポーツ科学講義
3. 学会等名 モンゴル国立教育大学体育学部（招待講演）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 松浪 稔、井上邦子、稲垣正浩	4. 発行年 2019年
2. 出版社 叢文社	5. 総ページ数 256
3. 書名 現代スポーツ批評—スポーツの「あたりまえ」を問い直す	

〔産業財産権〕

〔その他〕

2023年3月30日に行われた「日本とモンゴル国のアダプテッドスポーツの普及発展のための2国間国際会議」の内容は「NEWSつくば」で「障害者スポーツ普及へモンゴル人選手ら 茨城のホストタウン訪れ調査と交流」と題して配信されました。
<https://newstsuba.jp/44005/30/03/>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	山地 啓司 (YAMAJI KEIJI) (50012571)	立正大学・法学部・教授 (32687)	平成30年度科学研究費助成事業交付申請書により削除し研究協力者に変更した。平成30年4月19日
研究分担者	坂本 雅昭 (SAKAMOTO MASAOKI) (10187049)	群馬大学・大学院保健学研究科・教授 (12301)	
研究分担者	中澤 理恵 (NAKAZAWA RIE) (40455952)	群馬大学・大学院保健学研究科・助教 (12301)	
研究分担者	井上 邦子(松田邦子) (INOUE KUNIKO) (40278239)	奈良教育大学・保健体育講座・准教授 (14601)	
研究分担者	大森 聡 (OOMORI AKIRA) (90587049)	富山短期大学・その他部局等・准教授 (43202)	栄養調査担当として研究分担者に登録した。平成30年7月12日
研究分担者	中 比呂志 (NAKA HIROSHI) (00217639)	京都教育大学・教育学部・副学長 (14302)	
研究分担者	粕山 達也 (KASUYAMA TATUYA) (40631867)	健康科学大学・健康科学部・教授 (33504)	平成30年度科学研究費助成事業交付申請書により削除し研究協力者に変更した。平成30年4月19日
研究分担者	本川 佳子 (MOTOKAWA KEIKO) (60782026)	地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター(東京都健康長寿医療センター研究所)・東京都健康長寿医療センター研究所・研究員 (82674)	平成30年度科学研究費助成事業交付申請書により削除し研究協力者に変更した。平成30年4月19日

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
連携研究者	藤井 勝紀 (FUJII KATUNORI) (10165326)	愛知工業大学・経営学部・教授 (33903)	
連携研究者	澤 聡美 (SAWA SATOMI) (80369488)	富山大学・学術研究部教育学系・准教授 (13201)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 日本とモンゴル国の アダプテッドスポーツの普及発展のための 2 国間国際会議	開催年 2023年～2023年
--	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
モンゴル	モンゴル国立医科大学	モンゴル国立教育大学	モンゴル国立音楽・舞踊学校	他2機関